

## 第2の宗教改革

はじめに

### (1) 一日セミナーの開講

- ① ゴールデンウィークに、3箇所で開催した。
- ② 合計580名以上の参加者が与えられた。
- ③ 「千年王国論」をこれほど多くの方が学ばれたのは、画期的なことである。

### (2) 終末論の展望

- ① 教会が誕生したのは、使徒2章に記されたペンテコステの日である。
- ② 聖霊による異言が、教会誕生のしるしとなった（使2：3～4）。
- ③ それ以前の時代には、教会は未来形で語られていた（マタ16：18）。
- ④ 教会誕生以来、約2千年が経過した。
- ⑤ 預言的に見ると、次に教会に起こる大事件は携挙である（1テサ4：16～18）。
- ⑥ 携挙はいつ起こるか分からないが、いつでも起こり得る可能性がある。
- ⑦ 教会誕生から携挙までの間を「教会時代」と呼ぶ。
- ⑧ 「教会時代」と「恵みの時代」は、ほぼ同義である。
- ⑨ 教会時代が終わりに近づきつつあるのではないかという実感を、多くの人たちが抱いている。
- ⑩ 教会史の文脈の中で今を吟味し、自らの使命を確認する必要がある。

### (3) アウトライン

- I. 教会史の回顧
- II. 第2の宗教改革

#### I. 教会史の回顧

##### 1. 教会はいまだに完成していない。

(1) 教会史は、神がいかにしてキリストのからだなる教会を建設してこられたかという記録である。

- ① 普遍的教会と地域教会を区別しておく必要がある。
- ② 普遍的教会は、ペンテコステから携挙までに救われたすべての信者を含む。
- ③ 地域教会が、不信者も含む地上の教会である。

(2) 教会誕生から約2千年が経過したが、いまだに教会は建設途上にある。

- ① 教会が完成したときに、携挙が起こる。
- ② 異邦人の信者の数が満ちた時に、携挙が起こる。

2. 教会史を回顧すると、およそ 500 年ごとに大事件が起こっているのが分かる。

(1) 最初の重大事件は、紀元 392 年にキリスト教がローマの国教になったこと。

- ①テオドシウス帝の時代
- ②教会は異邦人中心の組織、名目上の信者が大半を占める組織になった。
- ③政治権力と結びついた教会は、必然的に墮落する。
- ④反ユダヤ的神学が確立されたのも、この時期である。
- ⑤特に、比喩的聖書解釈を採用した新神学がキリスト教を変貌させた。

(2) 次の大事件は、1054 年に起こった教会の東西分裂である。

- ①これを「大シスマ」と言う（シスマとは分裂という意味である）。
- ②ローマ法王を首長とするカトリック教会（西方教会）と東方の正教会（東方教会）が、相互に破門を宣言し、交流を断った。
- ③この断絶は、今に至るまで完全には修復されていない。

(3) それに続く大事件は、宗教改革である。

- ①1517 年、ルターはヴィッテンベルク市の教会に 95 ヶ条の提題を打ちつけ、ローマ教会の教理に意義を唱えた。
- ②一般的には、これが宗教改革の始まりとされている。
- ③プロテスタント信仰は、教会史の中ではまだ 500 年の歴史しかない。

## II. 第 2 の宗教改革

1. 教会史を学ぶと、およそ 500 年ごとに重大事件が起こるというパターンがあることに気づく。

(1) 21 世紀の前半を、そのような位置づけで理解する必要がある。

- ①宗教改革から約 500 年を経た今の時代、何かが起こり始めている。

(2) 宗教改革が解決することのできなかったテーマがいくつかある。

- ①救済論は、解決した。
- ②万人祭司説が回復された（その実践は未だに実現していない）。
- ③イスラエル論は、未解決である。
- ④終末論も、未解決である。

2. 第 2 の宗教改革と呼べるような現象がすでに起こりつつある。

(1) 解釈学の回復

- ①宗教改革に先立って、解釈学の回復があった。
- ②ディスペンセーションナリズムは、字義通りの解釈を土台にした神学大系。

## (2) メディア革命

- ①グーテンベルクの印刷機によって、聖書が印刷された。
- ②これが、一般人の聖書知識を深めることに貢献した。
- ③インターネットによるデジタル革命、情報革命が進展しつつある。
- ④デジタル空間に置かれた情報やメッセージに触れて、それだけで信じる人たちが起こされ始めている。
- ⑤メッセージ・ステーションには、月間40万件以上のアクセス数がある。

## (3) 反ユダヤ的神学の見直し

- ①プロテスタント神学の大半が、置換神学である。
- ②教会を霊的イスラエルと見なしている。
- ③それが、終末論の混乱をもたらしている。
- ④イエスをメシアと信じるユダヤ人たちのムーブメント（メシアニック運動）。
- ⑤21世紀の教会は、異邦人中心の組織から脱皮し、ユダヤ人信者と異邦人信者が「新しいひとりの人」（エペ2：15）を形成する理想形に変化しつつある。

## 結論

- (1) 「聖書研究から日本の霊的覚醒（目覚め）が」
- (2) 聖書研究の土台は、正しい解釈学である。
- (3) 神のことばには、超自然的なエネルギーが内包されている。